



新潟産業大学 地域に学び、地域をおこす
Niigata Sangyo University

2024年度地域理解ゼミナールⅣ 合同発表会

地域文化分野 発表者：全員

発表テーマ

「地域経営を巡る「災害対処の文化
論」」

担当教員：小林 健彦

2025.1.23

学習項目 目次

- はじめに 課題の提起 地域社会経営を巡る困難克服と文化
- 無常観と日本人
- 震災遺構と地域社会
- 新潟県中越沖地震と教訓の風化
- 情報伝達における「～の日」の方法論
- 新潟県柏崎市の「荒浜」研究
- 柏崎の町方としての本町の来歴
- 災害由来地名としての荒浜と松波
- 柏崎地域の地形図を読み解く
- おわりに 柏崎地域の形成と困難克服の経緯

はじめに 課題の提起 地域社会経営を巡る困難克服と文化

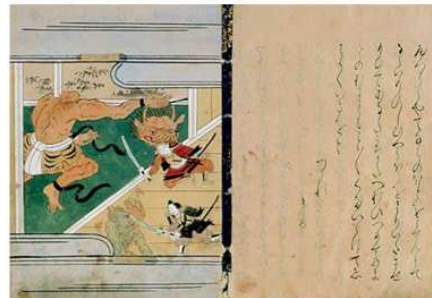
- ・日本列島は面積に対して、水面に接する距離が比較的長く、降水量も多いため水害が多発する。特に津波は多大な被害をもたらす脅威として認識されてきた。
- ・文字認知が未発達な時期は、それらの災害情報をどのように子孫に伝達するのかが大きな課題であった。
- ・日本人による地域社会の形成は、災害による被害とその克服であるともいえる。

文字認知と災害情報伝達

- ・日本への漢字伝来以降、近世以前の段階では寺子屋普及以前における、文字認知率、識字率の低さに加え、記録主体層、為政者等による興味対象の偏狭等の問題があり、必ずしもすべての災害が正確に記録されていたわけではない。
- ・災害を対象とした物語、作品は多くはないが室町初期～江戸初期に作成された御伽草子、室町後期～江戸中期に作成された絵入写本である奈良絵本がある。



出典:国文学研究資料館



出典:九州大学附属図書館

文責 小林拓也

震災遺構と地域社会

震災遺構は撤去が進められている。しかし・・・

かつての地震や津波被害に伴う記憶は、過去の被災者等が、
敢えて文字情報以外の手段をもって、後世の人々に対して、

震災等に拘わる **悲惨な被災の状況を明示し、**

残してくれたものと考えられる。

文責 高橋 斗亜

震災遺構 門脇小学校



文責 高橋 斗亜

津波の教え石と地域社会を守ること

閑上地区震災犠牲者慰霊碑



これを見てすぐに津波の高さが分かる
ことを重視した機能

津波の教え石

文責 高橋 斗亜

震災遺構及び津波の教え石はいずれも、
災害の恐ろしさを人々に伝え、亡くなった人
残された人それぞれのの思いが込められていると考えられる。

文責 高橋 斗亜

- 岩田県宮古市にある三陸復興国立公園山王園地の中にある田畑ヨシ氏が作った「海嘯（つなみ）鎮魂の詩（うた）」の石碑が建立される。

西澤昌一

- 田畑さんは昭和三陸津波（1933年）・東日本大震災（津波）を被災する。
- その体験を基に紙芝居「つなみ」を作成
→約30年に渡って読み聞かせを行う

西澤昌一

- 一方で宮城県牡鹿郡女川町では「いのちの石碑プロジェクト」が進行中である。
「1000年先まで記憶にのこそう。」という言葉掲げて6つの石碑を建立している

- その石碑は見て直ぐに
誰でもが理解することの出来る、
という津波災害に特化した
可視的装置である。

震災体験から得た教訓の「風化」
に対する懸念が上がり、
震災の教訓を後世に伝えていく
ことの必要性が議論されている。

～新潟県柏崎市の「荒浜」研究～

- ・ 柏崎市荒浜地区は元々は「かりやはま」や「かりわはま」と称した荒砂の原野であったとしている。
- ・ 柏崎の「民謡三階節」に詠まれている内容では荒浜に関して条件の悪い情景が描写されている。
- ・ 軍記物の「義経記」では「直江の津より船に召して、米山を沖懸に三十三里のかりやはまかつき、しらさきを漕ぎ過ぎて、寺お泊に船を著け」の「かりやはま」と称された地域の南端付近を現在の荒浜付近だとする説もある。



←「義経記」第七巻



← 柏崎市荒浜 1 ～ 2丁目

文責 榎駿斗

～柏崎町形成の謎～

・万里集九の「梅花無尽蔵」(1488年)という漢詩作品集で当時の「都市化した柏崎市」の姿を記した部分があるが合計9000戸の民戸とかなりの大都市であったされる。

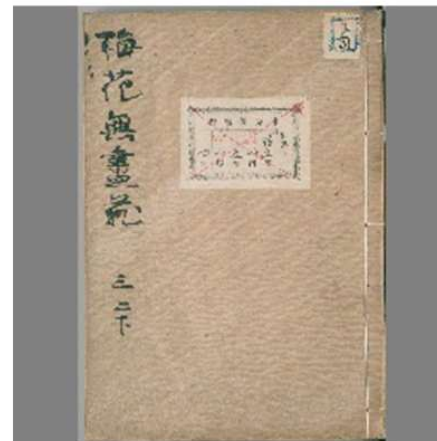
→若干の誇張や曲筆、書き間違いであった可能性もある。

・15世紀末の柏崎では鱒(マス)等の海産物市場や青苧(あおからむし)といった商品作物や荘園年貢の物資の集積地、西方への港として機能を果たしていた。

→こういった観点から大都市という見方はある程度の整合性は見取れる可能性はある。



← 万里集九銅像



← 梅花無尽蔵

文責 槇駿斗

柏崎の町方としての本町の来歴

中世段階に於ける柏崎町中心部は、鵜川河口部に所在したとされる湊、古代の「水門（ミナト）」にも近い、

現西本町地区で発生、展開し、それが徐々に、現東本町方面へと東方向へと伸展して行ったものと考えられて来たが、当該発掘調査の結果に依り、現東本町地区にも、西暦1400年段階に於いて、町屋の存在が明らかとなったのである。

しかし、それが現東本町地区に於いて、当該期に町方の形成を立証することには至っていない。

柏崎町の謎の廃墟

柏崎町が何らかの被害を被って、そこより住民が集団的に退去していた。

その被害や住民退去の理由は、戦災、自然災害のどちらかであろう

発掘調査の結果では災害痕跡は見出されていない。

戦災、火災痕跡も同様

柏崎地域の地形図を読み解く 特徴①②

- 中世由来の地名がほとんど見当たらない
- 植物由来の文字を用いる地名が多い
(茨目や藤橋など)

→ 地面の元来の形状や成立を想起させるもの
→ 植生でしかその場所の特質を示せなかった
⇒ 中世由来の地名が少ない理由なのではないか

柏崎地域の地形図を読み解く 特徴③

- 赤坂・緑町以外に色彩にかかわる地名がない

→現在の柏崎・刈羽の平坦部が水で覆われた湖沼地帯であったからかもしれない

参考文献表

- 小林健彦『災害対処の文化論シリーズ V ～浪分けの論理、水災害としての津波～』2016年3月初版発行、シーズネット株式会社
- 小林健彦『災害対処の文化論シリーズ III ～新潟県域に於ける謎の災害～』2015年8月初版発行、シーズネット株式会社

ご清聴頂き、感謝申し上げます！！

地域文化分野一同より